

## 西岸地区パレスチナ人に対する入植者暴力

マーカー・ハメド（パレスチナ人ジャーナリスト）著、脇浜義明訳 \*脚注は訳注  
ドロップ・サイト・ニュース、2026年3月27日



占領下のヨルダン川西岸地区ディール・アル・ハタブにある自宅で、イスラエル人入植者による襲撃と放火の被害を受けたパレスチナ人男性。  
2026年3月23日。Photo by Issam Rimawi.

占領下のヨルダン川西岸、ラマッラー発——占領下の西岸地区のジェニンの南に位置するアル・ファンダクミヤ村でパレスチナ人がイード・アル・フィットル（ラマダーン月の終了を祝う祝祭）いた土曜日の夜、数十人の「イスラエル人入植者が村を襲撃し、村人に暴行し、家や車に放火した。村議会のガッサン・カラリエ議長は、「彼ら真夜中に襲ってきた。イードの夜で、みんながこんな厳しい状況の中で、少しでも喜びを感じようとしていたのに、襲撃で台無しになった」と、ドロップ・サイト・ニュースの取材で語った。

カラリエは深夜の出来事を「あつという間の恐ろしい出来事」と表現した。襲撃した入植者らは、アル・ファンダクミヤ村から3マイル（約4.8キロ）離れた、北部のジェニン、トゥルカルム、ナブルスを結ぶ幹線道路沿いのホメシュ入植地からやってきた。彼らは近隣の村々へ移動して乱暴を働き、1時間以内で13人のパレスチナ人を負傷させた。この数週間、このような入植者暴力が西岸地区全体で広がっており、パレスチナ人集落を恐怖に陥れている。

週末にあった襲撃は、入植者がTelegramやWhatsAppなどのSNSを使って、28日の違法入植前哨地シュヴァ・イスラエル・ファームに住む18歳の入植者イエフダ・シャーマンが自分の車とパレスチナ人の車の衝突事故で死亡したのを、パレスチナ人による車両衝突テロだとして、その報復をしようとして呼びかけて、組織して、襲撃したものである。また、入植者たちはイラン戦争とイランのミサイル攻撃をパレスチナ人コミュニティ襲撃の動機として挙げている。シェヴ

ア・イスラエル・ファームのウェブサイトには、我々の使命は「北サマリア全域で前衛として活動することで、土地を奪取し、ユダヤの地とすることが目的だ」と記されている<sup>1</sup>。

入植暴力は29日の日曜日まで続き、西岸地区全域で少なくとも25件あった。ナブルス近郊のベイタ、カリユート、デイル・シャラーフ、フワラ、デイル・アル・ハタブなどの村が襲撃された。パレスチナ赤三日月社によると、最もひどかったのはデイル・アル・ハタブで、パレスチナ人9人が負傷した。入植者は車両や住宅に放火し、村人を殴打し、羊の群れを盗み、寝ているパレスチナ人に催眠スプレーを噴射し、中学校を襲った。ラマッラーの東にあるブルカ村では、診療所を焼き払うなど数々の暴力を行った。ブルカ村はこれ魔にも何回も入植者の襲撃を受けている。デイル・アル・ハタブ村の焼け焦げた車や壁には「復讐」という落書きがあった。



イスラエル人入植者による襲撃の後、占領下のヨルダン川西岸地区デイル・アル・ハタブで、焼け焦げた車と壁に落書きされた「復讐」という文字。2026年3月23日。Photo by Issam Rimawi.

カラリエは、シャーマンの死亡事件が今回の暴力の波の動機になったかもしれないが、入植者の襲撃は以前から日常的にあったと述べた。「うちの村はもちろん、ブルカ村やベイト・イムリン村など周辺の村も、今回が初めての襲撃ではありません」と述べ、「最近では襲撃が頻繁になっている」と付言した。「たいていは深夜、人々が家族と家で眠っているとき、昼間の仕事で疲れて眠っている隙を狙って襲撃してきます。」

イスラエルのガザ・ジェノサイドと並行して頻繁になり、2025年には過去最高の水準となった西岸地区への入植者暴力は、先月米・イスラエルのイラン攻撃が始まってからいっそう激化した。国連によると、2026年初頭から3月16日

<sup>1</sup> イスラエルはヨルダン川西岸地区を聖書に出てくる「ユダヤ・サマリア」と呼ぶ。米国の親イスラエル州では、「西岸地区」という呼称を廃して「ユダヤ・サマリア」を使うことを義務付ける州法を制定している。

の間にイスラエル軍と入植者によって殺害されたパレスチナ人は子ども6人を含む26人で、そのうち18人は占領軍によって、7人は入植者によって殺害された。入植者の襲撃による負傷者は260人以上になる。

イラン戦争が始まった2月28日から3月16日の間に、国連が報告したパレスチナ人殺害の半数以上と負傷者の100人以上が発生した。パレスチナ自治機関の一つである植民地化と分離壁に抵抗する委員会 (CWRC)は、1月初めから3月中旬の間に発生した入植者襲撃は1000件以上と記録しており、そのうち200件以上はイラン戦争開始後最初の2週間に発生した。

アムネスティ・インターナショナルによると、イスラエル占領当局は2025年12月以降、「占領下西岸地区（東エルサレムを含む）のパレスチナ人を意図的に追放して、西岸地区のイスラエル併合を不可逆にする」ために計画された一連の措置を講じている。記録的な数の新入植地建設、既存入植地の拡大、土地をイスラエル国有地として公式登録するなどの措置で、アムネスティ・インターナショナルはこれをパレスチナ人からの土地収奪を目的とした「過激で違法な」措置と非難している。アムネスティ・インターナショナルの調査・擁護・政策・キャンペーン担当の上級ディレクターのエリカ・ゲバラ・ロサスは声明を出し、「西岸地区における違法入植地の拡大と、国家が支援する入植者の暴力と犯罪の急増は、国際社会が断固たる行動をとらなかったことが生み出した結果である」と言った。

情け無用の暴力のために、西岸地区のパレスチナ人の生活がほとんど不可能になっている。「私には9人の家族がいる。私の生活の糧である自動車が奴らに燃やされた」と、タクシー運転手のファディ・イッサがドロップ・サイトに語った。彼はナブルスの南のカルト村で入植者の襲撃を受けた。「奴らは突然襲ってきて。あっという間にすべてを燃やし、すべてを破壊した。夜に急襲したので、みんなが気付いたときにはもう手遅れだった。」

国連によると、イスラエル兵と入植者の襲撃で避難せざるを得なくなったパレスチナ人の数は、2026年の最初の2か月半で、2025年に記録された数の95%に達した。また、イスラエル占領当局はイラン戦争開始以降、パレスチナ人の移動制限を強化し、検問所や分離壁を増やして、西岸地区を事実上封鎖状態にしている。入植者も多くのパレスチナ人の村や町の出入り口を封鎖している。

タクシー運転手のイッサは、「どうしたらよいのか分からなかった。入植者が放火した火を消しに行くべきか。家族を守って一緒にいるべきか迷った」と言った。そして、家族のことを、「子どもたちは精神的に不安定になり、絶えず恐怖で怯えている。私は子どもたちを懸命に慰めているけれど、私の言葉は、子どもたちが毎日見ている現実の前には、何の力もない」とドロップ・サイトに語った。

入植者の違法な攻撃をイスラエル兵は止めずに、傍観し、入植者を擁護している。イスラエル兵も頻繁にパレスチナ人を攻撃する。武器を持たない住民は自分たちで村や町を守ろうとパトロールを始めた。「国際社会は見て見ぬふりをしている。イラン戦争の前からそうだった。ジャレードとカリュートへの襲撃は特に残忍なもので、それは今も続いている。入植者が好き放題に乱暴ができるのは、世界が黙認、いや支持しているからだ。私たちは見捨てられている」とイッサが語った。

西岸地区南部の状況はもっとひどい。CWRC（植民地化と分離壁に抵抗する委員会）によると、ヘブロンへの入植者の襲撃が最も多く、イラン戦争開始後47回も攻撃された。襲撃場所は、南ヘブロン丘陵にあるパレスチナ人村落群であるマサフェル・ヤッタに集中している。アルトゥワネ村議会のモハンマド・ラバイ議長は、自分たちの村は「耐え難い苦しみ場」となったと言った。彼はドロップ・サイトの10分間のインタビューでそう語ったのだが、その間村人からの被害報告の電話で5回インタビューを中断した。

アデル・ハムムデはマサフェル・ヤッタ地区で、80年間一家が所有してきた土地で、妻と子どもたちと暮らしている。彼は、現在入植者が1日に数回襲撃して、土地から追い出そうとしていると語った。「毎日襲撃されている。私たちは彼らが何故こんなことをするのかと叫びます。イラン戦争が始まってから襲撃が激増しました。私たちは常に恐怖の中で暮らし、子どもたちはすっかり怯えています」と述べ、さらに「彼らは思いつくままにどんな手段でも使います。催眠スプレーを浴びせたり、殴ったり、身柄拘束したり、女性に暴力を振るい、羊を盗みます。この前は私と家族を殺すと脅かされ、『お前たちが住んでいる土地は神が我々に約束した土地だ。2、3日のうちにメッカかヨルダンへ行け』と言われました」と、ドロップ・サイトに語った。

